

20世紀とはどんな時代だったのか

20世紀資本主義と 三人が描いた理論の循環



Nishibe Makoto
西部 忠

100年という尺度で過去を「思い起こす」ことは容易ではない。10年ならば自分の人生で何回か経験してみることで、そこで起こりうる出来事の総体とその変化の幅についてだいたいの見当がつく。だが100年は通常の人生の長さを超えているため、われわれが実感できるような人間的時間ではない。それはいわば歴史的時間である。そうした時間尺度では、時代の流れは大きく二転三転し、時に人々の主観的な希望や予測を過酷に裏切って人々を失望させ驚かせる反面、同じような歴史的事象のパターンがしばしば反復する。それゆえ、100年を展望するためには、いまここから眺めえる山だけでなく、その後ろに隠れた山々とそれらがそびえる大地をも鳥瞰的に視野に入れなければならない。

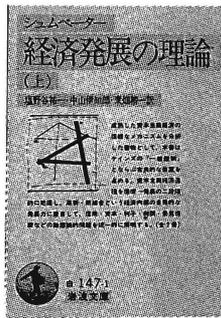
すべての研究は問題の発見から出発する。問題の発見には、まだ包括的な全体として現れていない諸事物の間に隠されたまとまりを洞察する直観と、その問題に含まれるであろうすべての帰結を「信じる」主体的な関与が必要とされる。そして経済学者の偉大さは、彼がそれまで

他の人が夢想だにせぬ独創的な問題を発見したことによるのであって、すでに存在する問題に対して見事な解答を与えたことによるのではない。こうした観点から、偉大なる「暗黙知」を具えた問題の発見者としてシュンペーター、ケインズ、ハイエクを取り上げよう。そうするのは、たんに彼らを賞賛するためではなく、今世紀の経験を主体的に再構成し、次世紀の大きな問題を「発見」するための手がかりとして彼らを利用するためである。

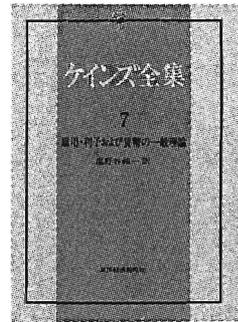
20世紀の経済社会における大きな問題とは何だったのか。いまが旧社会主義国の市場化と規制緩和・自由化の時代であるために、時としてその後方の山々は見失われがちだが、今世紀は二回の世界大戦と多くの社会主義革命を伴う「戦争と革命」の世紀であり、また「市場と計画」あるいは「自由と統制」のあいだを極端に揺れ動いた世紀であった。70年代前半まで経済の計画化・統制化の方向へ向かった流れが反転して、市場化・自由化の方向へ向かったわけである。そして、あの三人が「資本主義と社会主義」という大きな問題をそれぞれ独創的な観点から発見した人々であったとしても少しも不思議ではない。

●シュンペーターの動的循環論

シュンペーターの『経済発展の理論』（1912年）は、一見すると水と油のようなマルクスとワルラスの理論を統合して、「資本主義とは本性的に動的である」というヴィジョンを経済



シュンペーター著
塩野谷・中山・東畑訳
『経済発展の理論(上・下)』
岩波文庫、上・六〇〇円、下・五六〇円



ケインズ著、塩野谷祐一訳
『雇用・利子および貨幣の一般理論』
ケインズ全集7
東洋経済新報社、五一四六円

システムの内生的発展過程として提示し、それにより景気循環理論を展開しようという試みであった。彼の動態論は、企業者が行う新結合＝革新(イノベーション)が静態循環を破壊し、その結果として経済体系が非連続的・飛躍的に発展する過程を対象とする。シュンペーターは、革新を担う企業者機能と企業者に金融的支援を与える銀行の信用創造機能を資本主義経済の両輪と考えた。新結合の群生的出現が好況を、その非連続的攪乱の吸収・整理過程が不況を説明する。こうして、資本主義経済は循環と発展の二側面から理解される。

後にシュンペーターは資本主義の死滅を予想した。寡占・独占型の資本主義は、企業者機能を大規模組織の官僚的機構に置き換えたため、その革新的な動態性を失って、ついには社会主義に道を譲る、と。シュンペーターの悲劇は二重である。彼が10年代に描いた動態的長期理論は、大恐慌後の不況に沈んでいた30年代には説得力を持ちえなかった。しかも、シュンペーターが必然と信じた社会主義はまさに彼が資本主義の本性とみた動態性の不在のゆえに90年代に崩壊してしまったからである。

●計画化・組織化を推進したケインズ

ケインズの『一般理論』(1936年)は、社会主義体制の成立と大恐慌によりその存続が危ぶまれた資本主義を改造する実践的な処方箋を携えて登場した。それは、需要面に焦点を当てる短期の理論を核とし、政府による完全雇用政策

を提唱する。中央銀行による貨幣供給が一定ならば、それと流動性選好による貨幣需要が一致する点で利子率は決定され、利子率に資本の限界効率一致するところで投資量が決定される。この投資量が乗数理論により国民所得を決定する。このとき、利子率が高いか、消費や投資などの有効需要が不足するときには、不完全雇用水準で国民所得が決定される。ケインズは、こうして有効需要の不足による非自発的失業の存在を解明し、完全雇用実現のために、金融・財政政策、とりわけ公共投資をつうじた財政政策を推奨したのであった。

注目すべきは、ケインズ理論がファシズムの台頭や第二次大戦の勃発を阻止できなかったということである。というより、それは、資本主義経済が組織化と官僚化の方向に進み、列強各国が保護主義的に閉じていった30年代の時流にむしろマッチしていた。しかも、それは本人の意図にかかわらず、戦時の統制経済や戦争の需要創出に適用されうる側面をも持っていたし、結果的に第二次大戦後の東西双方における経済の計画化・管理化の拡大を後押しする論理を提供したのである。戦後のブレトンウッズ国際通貨体制のもとで、先進国はケインズのマクロ政策を行う福祉国家へと変貌し、ケインズ政策は微調整による安定成長を実現した黄金の一時代を築いたことで、景気循環はもはや過去のものになったかに見えた。しかし、それも70年代における各国の膨大な財政赤字やスタグフレーションの発生により不可能になった。経済の計画化・組織化を1930年代から批判してきたハイエ



ハイエク著、嘉治九郎・嘉治佐代訳
『個人主義と経済秩序』ハイエク全集
3
春秋社、五五〇〇円

クが脚光を浴びたのはこのような時代にほかならない。

●自由主義を説いたハイエク

ハイエクの『個人主義と経済秩序』(1948年)は、彼が主として第二次大戦終結前に、社会主義と計画経済を批判し、自由主義と市場経済の優位を説いた諸論文を取めたものである。ソ連の集権的計画経済は市場なしでも存立可能なのか。この問題をさまざまな経済学者が議論した「社会主義経済計算論争」に、ハイエクはその師ミーゼスとともに参加し、社会主義経済の不可能性を次のように主張した。計画当局は効率的な経済計画を実行するために、技術や嗜好などの情報を収集し、膨大な計算を行わなければならないが、大規模で複雑な経済では、「現場」に携わる人々の知識を集中化することはできないし、さらに禁止的な演算処理能力が要求される、と。この論争の過程で、一般均衡理論を応用した「市場社会主義」が提案されたため、主流派はハイエクらの敗北を宣告した。

ところが、70年代後半以降、特に、集権的計画思想の破綻が明白になった90年代に、ハイエクの反設計主義・反合理主義は注目を集めた。市場制度がなぜ必要なのかという根本問題に経済学者が再び直面したからである。この問いに対するハイエクの答えは、市場は社会に分散する知識を利用する仕組みであり、自由な競争こそ知識の創造・発見を生み出すというものであった。

●三人の理論が交互に支配した20世紀

今世紀はこの三人の周りを一巡した。彼らの理論は支配的な影響力を交代で発揮してきた。20年代までがシュンペーター、それ以後70年代前半までがケインズ、それ以後今日までがハイエクというように。今日は、基本的にはハイエクの時代でありながら、情報技術革命が急速に進行しているという意味でシュンペーターの時代に戻りつつあるように見える。そして、この支配的理論の循環は、資本主義経済自体の変容——金融資本主義、国家独占資本主義、新自由資本主義の——にちょうど対応している。彼らは資本主義経済の相互補完的な三側面、すなわち、その「動態性」「組織化・計画化と国家管理」「自由と知識の発見」を理論化したのだともいえる。すると、この全体の背景に19世紀のマルクスが影絵として浮かび上がる。

ここで取り上げた三人の著作がいずれも今世紀の前半に出版されたことを考えると、今世紀の主要な問題はその前半にはすでに出尽くして、その後半はもっぱら「パズル解き」に忙しかったといえるのではないか。21世紀は、この三人が描いた循環を反復しつつも、それをどこかで突き抜けるかもしれない。それがどのような方向であるかを述べる余裕はもはやないが、20世紀のみならず、さらに過去の経験をも思い起こしてみる必要があるとだけ付け加えておこう。

●にしべ・まこと

1962年生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。現在、北海道大学経済学部助教授。著書：「市場像の系譜学」(東洋経済新報社)など。